

### 新規フロアブルガラスアイオノマー系レジンの 小児歯科臨床応用

○ 中村紀彦<sup>1) 3)</sup>, 福本敏<sup>1)</sup>, 岩本勉<sup>2)</sup>, 山田  
亜矢<sup>1)</sup>, 野中和明<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 九大・院・小児歯, <sup>2)</sup> 九大病院・小児歯,  
<sup>3)</sup> なかむら歯科医院

〔目的〕 レジン修復は小児歯科臨床で、最も使用頻度の高い修復法である。しかしながらレジン材自体にはフッ素を徐放する効果はほとんどなく、フッ素徐放性レジンにおいても、その徐放フッ素濃度はガラスアイオノマーセメントに及ばない。一方でガラスアイオノマーセメント修復は、そのフッ素徐放効果により抗う蝕効果を期待できるが、機械的強度はレジン修復材に及ばない。我々はこの両者のメリットを有する新規ガラスアイオノマー系レジンの小児歯科臨床への応用を試み、その修復材料の長期的予後とう蝕予防効果について検討を行った。

〔方法〕 平成17年7月より平成19年6月までに当医院を受診した患者に対し、C<sub>1</sub>からC<sub>2</sub>までのう蝕に対してフロアブル・ガラスアイオノマー系レジン（松風ビューティフル®）でレジン修復を行った。レジン修復直後、修復後3か月、6か月および1年に予後調査を行い、修復物の破折、脱離、2次う蝕発生および隣在歯う蝕の発症頻度について検討した。

〔結果及び考察〕 修復後3か月以上経過した乳歯31本、永久歯28本を調査した結果、辺縁破折を生じた歯が6本認められた。その破折部位はマージン部分の非薄な部分のみで、臨床上問題ない程度であった。脱離、2次う蝕、隣在歯う蝕については12か月の予後調査では1本も認められなかった。このことから本製品は機械的強度に関して、臨床的に大きな問題はなく、2次う蝕、隣在歯う蝕が認められなかったことから、本製品の持つフッ素徐放性・リチャージによるう蝕予防効果が期待できるようである。今後は更に予後調査期間と対象母数を考慮しながら検討を深める予定である。